

タイトル	エルンスト・トレルチにおける「歴史化」概念の再帰性
著者	塩濱, 健児; SHIOHAMA, Kenji
引用	年報新人文学(12): 171(067)-158(080)
発行日	2015-12-25

# エルンスト・トレルチにおける 「歴史化」概念の再帰性

塩濱 健児

エルンスト・トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923) は晩年に歴史主義の問題の解決に取り組み、『歴史主義とその諸問題——第一巻 歴史哲学の論理的問題』を著わした。そして、この浩瀚な著作において、「歴史主義の克服」という課題に挑み、そのことを「歴史を歴史によって克服する」(Geschichte durch Geschichte überwinden)<sup>(1)</sup> という意味深長な言葉で表現したと見なされてきた。しかしながら、必ずしもこのことは自明のことではなく、トレルチが「歴史主義の克服」を目指したのかどうかについては、慎重に検討する必要がある。とはいえ、『歴史主義』(Historismus) に対する「トレルチの真意」についてはわれわれの主たるテーマではない。トレルチにおける《歴史主義》概念を明らかにすることが、本稿におけるわれわれの目的であるので、その「真意」については示唆するだけにとどめ、詳細は別稿に譲ることとする。トレルチにとって、『歴史主義』とはいかなるものであったのか。

トレルチの《歴史主義》というと、次の定式がほぼ決まり文句のように引用される——「人間とその文化や諸価値に関するわれわれの思惟の根本的歴史化」(die grundsätzliche Historisierung alles unseres Denkens über den Menschen, seine Kultur und seine Werte)<sup>(2)</sup>、または「精神世界についてのわれわれのすべての知識と感覚の歴史化」(die Historisierung unseres ganzen Wissens und

Empfindens der geistigen Welt)<sup>(3)</sup>。これらの晩年の定義にしたがうならば、トレルチは《歴史主義》を「歴史化」(Historisierung)という概念によって表現しようとしているといえる。われわれはまず、この「歴史化」概念を全体的に検討することにより、《歴史主義》概念の一端を明らかにして、その「再帰的構造」(Reflexionsstruktur)<sup>(4)</sup>を概観しよう。次に、この「歴史化」概念に含まれている「脱歴史化」という重要な契機を分析することを通して、「歴史化」概念の再帰性のメルクマールについて考察する。そして、最後にかの「歴史を歴史によって克服する」というフレーズそのものの構造を「歴史化」概念の構造と比較することによって、トレルチの《歴史主義》概念そのものの構造の一部を明らかにしていこう。

### 「歴史化」概念の再帰的構造

最晩年のトレルチは、1922年の「歴史主義の危機」という論文において、《歴史主義》を明確に「歴史化」概念を用いて定義する。繰り返しになるが、彼自身による重要な言葉なので、その前後を含めてもう一度引用する。

歴史主義とは19世紀が進行するなかで生じたような、精神世界についてのわれわれのすべての知識と感覚の歴史化を意味する。われわれはここではすべてのものを生成の流れにおいて、すなわち、無限にそしてつねに新たに個性化し、過去のものによって規定されつつ、知られざる将来的なものへと方向づけられたものとして見るのである。国家、法、道徳、宗教、芸術は歴史的生成の流れのなかに解消されており、われわれにはいたるところでただ歴史的発展の構成要素としてのみ理解され得る。このことは一方では、あらゆる偶然的なものと同格的なものが個を超えた広大なる連関

に根差しているとの感覚を強め、過去の諸力をそのときどきの現在に引き渡す。しかしそれは他方では、それが教会的・超自然的な、それゆえに最高の権威を有するものであれ、永遠の理性的真理ないし国家、法、社会、宗教、倫理に関する理性的構成物であれ、世俗的権威とその支配形式に関係づけられた国家的教育の強制であれ、あらゆる永遠的真理を動揺させる。かかる意味での歴史主義は、事物を比較して発展史的に関係づける思考が精神世界の隅々にはじめて滲透した結果であり、これは古代や中世の思惟方式、いやそれどころか、啓蒙主義的・合理的な思惟方式からも根本的に区別される、精神世界に対する近代特有の思惟形式なのである。<sup>(5)</sup>

トレルチの説明にしたがうならば、われわれの精神世界ないし思惟が「歴史化」したことにより、われわれはすべてのものを「生成の流れ」(Flusse des Werdens) という枠組みのなかで捉えようとして、すべてのものを歴史的に生成したものであると考えるのである。そして、すべてのものは過去によって規定されていると同時に、「知られざる将来的なものへと方向づけられたもの」として捉え直されるのである。つまり、トレルチにとって「歴史化」とは、過去への眼差しと同時に、そこから反転して現在ないし将来をも見据えるという二つの方向性を有しているといえる。とはいえ、この「歴史化」による影響も一様ではない。一方で、歴史的連関に対するひとびとの意識・感覚を強めることで、「過去の諸力をそのときどきの現在に引き渡す」という役割を果たしつつも、他方で、それがいかなる権威を有していようと、「あらゆる永遠的真理を動揺させる」という、歴史的相対主義と呼ぶような懐疑的状况も引き起こす。少なくとも晩年のトレルチにとって《歴史主義》は、両面価値的な意味があったといえよう。

以上のことからわかるように、トレルチの「歴史化」概念はそう単純なも

のではない。トレルチはある箇所において、「単なる歴史化」というものに対する否定的な考えを述べている。

他方、過去のことが現在と関係づけられることによって、過去のことが再び単なる歴史化や客観化から守られる。この単なる歴史化や客観化は、結局ただ専門的な批評雑誌が扱うだけのものであって、それがたくさんたまればたまるほど学校の授業において記憶力の負担が大きくなるといったしろものである。いつでも、過去のことと現在のこととの接触があって、そこにはじめて本来の究極的基準、すなわち同時に未来形成を未知の無限な未来へと駆り立てていく基準が形成される。<sup>(6)</sup>

トレルチにとって、一方的に過去へと向かう「単なる歴史化」は避けられるべきものなのである。歴史学そのものに対する批判ではないにせよ、過去についての専門的知識をただ増やすという単なる専門主義的・好事家的なスタンスに対して、トレルチは不満を覚えている。このスタンスに対する評価の可否は別として、トレルチはそこにとどまらずに、同時に過去と現在を結び、「未来形成」を担う基準の形成をも含む「歴史化」の必要性を説いている。ここから言えることは、トレルチにとって「単なる歴史化」とは、実証主義的な歴史研究のあり方であり、客観的に距離をとりつつ、過去の出来事を対象化していくものである。ランケの言葉を借りるならば、「本来どうであったのか」(wie es eigentlich gewesen) にのみ関心を抱くようなこの立場に対して、トレルチにとって歴史とは過去を振り返るだけのものではなく、そこからさらに一步踏み込んで、過去に対する反省的・省察的な態度をもつことで、現在のわれわれへと翻ってくるものである。そして、そこからさらに未来をも形成していくための指針をも見いだしていこうとしたのである。

以上のように、トレルチの「歴史化」概念には一種の再帰的構造をみることができよう。第一に、実証主義的・客観主義的に現在という視点から過去を振り返る——端的に言えば、これが「単なる歴史化」であろう——と同時に、第二に、そこから反省的・省察的に翻って現在を逆照射し、さらに未来を展望するという二つの段階をもつ構造を有している。この構造は、過去と未来という二つのベクトルを併せもっているため、反転したメビウスの輪のようなイメージを喚起する。この構造が具体的にどのような形で遂行されるのか。再び彼の言葉に耳を傾けてみよう。

こうした〔理念や価値の合理化・空虚化といった〕危険が感じ取られるときには、歴史学的研究はこれらの理念や価値を再びその母なる基盤へと連れもどし、それらを具体的、起源的、活性的な意味によって満たす。そうすることで、それらの理念や価値はもちろん現在から遠ざけられ、歴史化される。しかしまさしくその時あの分離化の過程が新しく開始され、そのようにして意味を満たされ、活性化された文化的内実が、再び歴史を超えた原理にされるのである。<sup>(7)</sup>

これは『歴史主義とその諸問題』の最後に取り上げられる「三つの重要な認識」の第一命題として彼が述べている言葉の一部であるが、この引用にも示されているように、「歴史化」ということが意味するのは単に過去へとその起源を遡ることではない。ある理念や価値が現在から遠ざけられ「歴史化」されることによって、それらは意味を満たされ活性化される。そこで再び過去のコンテキストから切り離されることで、それらは「歴史を超えた原理」として甦生されるのである。歴史という特殊なものから、ある意味普遍的・永遠的なものを取り出そうとするのであるが、それは繰り返し為されなければならない。この現

在から過去へ、そしてそこから反転して現在・未来へという循環は、一度為されるだけではなく、絶えず刷新されるべき事柄である。そのつど「一つの実践的な態度決定」<sup>(6)</sup>をすることによって、そのような「歴史を超えた原理」を甦生していくのである。

したがって、トレルチにおける「歴史化」概念には以下の二つの次元の循環を読み取ることができよう。

- 一. 時間的・空間的な意味でその起源へと遡る実証主義的・客観主義的「歴史化」——「単なる歴史化」はその代表といえる。
- 二. 「単なる歴史化」にとどまらずに、歴史家ないし歴史哲学者による探究により、活性化された理念や価値が「歴史を超えた原理」として生まれ変わり、現在ないし将来を見据えた新たな理念として形成されるという、時間を超越した次元。

この二つの次元の事柄が現在を始点としつつ繰り返し生じるというところに、トレルチの「歴史化」概念の特徴の一つが表れている。また、歴史を超えた甦生という未来形成的な側面からは、この再帰性のなかにみずからの尾を噛むウロボロスのような永遠性を垣間見ることができよう。《歴史主義》を「歴史化」概念によって捉えることが正当だとするならば、同様の構造が《歴史主義》そのものにもみられるといえるだろう。ところで、過去へと起源を遡る「単なる歴史化」に対する反転の局面としての「歴史化」の上記の二の次元は、トレルチが「脱歴史化」(Enthistorisierung)と呼ぶ契機に相当すると思われる。次に、この「脱歴史化」についてわれわれは考察を進めよう。

## 「歴史化」のなかの「脱歴史化」

「脱歴史化」については、トレルチのハイデルベルク時代の講義を取録した遺稿『信仰論』において語られる言葉が示唆的である。

だが、信仰はもっぱら時間を超越したものに属するものに向けられており、したがって、歴史的なものを脱ぎ捨てなければならない。なぜなら、時間を超越したものは、直接的に現在のなものだからである。ひとは頭を後ろ向きにしながら信じることはできない。ひとは現在のものと、時間を超越したものに関してのみ、信じるのであって、幾千もの媒介物によって伝承された過去のなものに関しては、信じることはできない。ひとは未来に関して、また不死性に関して、信じることができる。だが、われわれが後ろ向きになるやいなや、すべてのものは苦痛に満ちた概観を呈する。イエスが神的なものの可視化にほかならず、本来的な意味での歴史的人物でないとするれば、その場合、彼は時間を超越しており、父〔なる神〕と等しいことになる。信仰はその対象を容易にイエスにおいて見いだすことができる。イエスは、あらゆる瞬間に、王として現在のであり、あらゆる祈りを聞き分ける。そして彼とともに、彼の周りに集まっている全歴史も脱歴史化される。永遠が歴史的制約の中に入ってくる。そして歴史に対する信仰において、永遠を把握することが可能となる。<sup>(9)</sup>

ここで問題となっているのは、「歴史と信仰」の問題であるといえよう<sup>(10)</sup>。信仰の対象となりうるのは、「現在のなもの」と「時間を超越したもの」であるとして、「過去のなもの」に関してはその対象となりえないと主張する。とはいえ、「歴史的なもの」についても、信仰の対象となる余地を与えているように



思われる。「歴史的なものを脱ぎ捨てる」ことによって「脱歴史化」された事柄は「歴史を超えた」ものとして認識され、信仰の対象となりうるのである。これまでの考察からも明らかなように、この「脱歴史化」には、トレルチのいう「単なる歴史化」とは明らかに位相の異なる認識が含まれている。トレルチにとって、「歴史と信仰」あるいは「歴史と規範」という問題が中心的な課題であったことは、今までも指摘されてきたことではあるが、トレルチの《歴史主義》概念ないし「歴史化」概念においても、大きなモチーフとなっている<sup>(11)</sup>。トレルチの「脱歴史化」の契機は、この問題との関連において考察するのが、われわれには最も適切であると思われる。この点を確認したところで、もう少し、「脱歴史化」の契機の分析を続けてみよう。

先の引用から推測されるところでは、「歴史的なものを脱ぎ捨てる」ことによって遂行されるのが「脱歴史化」である。それでは、「歴史的なものを脱ぎ捨てる」とはいかなる意味なのか。また、いかにして「歴史的なものを脱ぎ捨てる」のか。この文章だけでは、これらの事柄についてのトレルチの考えは判然としないが、先ほどの「歴史化」概念の考察を参照してみると、その意図するところが姿を現わすように思われる。われわれはすでに「歴史化」概念の二つの特徴について述べたが、その第二の点がまさにこの「脱歴史化」の意味するところではないだろうか。ある理念や価値を現在から遠ざけ、時間的・空間的な起源へと立ち返って意味を満たして活性化する「単なる歴史化」に引き続いて、それらの理念や価値がその歴史的コンテクストから分離されることによって、「歴史を超えた原理」として甦生される「歴史化」の作用——これがすなわち「脱歴史化」の契機ではないだろうか。

つまり、トレルチは「脱歴史化」を遂行するために超自然主義の立場に戻ろうとしたり、まして《歴史主義》の立場を放棄しようとしたりはしないのである。あくまでトレルチは《歴史主義》の立場を軸とすることによって、ある意

味《歴史主義》を超えていこうとするのである。以上の考察から推測するに、トレルチは《歴史主義》の克服を意図的に望んでいたわけではないが、《歴史主義》を徹することにより、結果的に《歴史主義》を超えた立場が臚げに見えていたように思われる。それでは、いかにして「歴史的なものを脱ぎ捨てる」のか、あるいは、歴史的コンテクストからの分離はいかにして遂行されるのか。このような「脱歴史化」は、おのずからその現象が生じるわけではない。トレルチはある箇所で、この「脱歴史化」を遂行する主体の存在について暗示している。まさにその箇所こそ、「歴史を歴史によって克服する」というフレーズである。われわれは最後にこのフレーズの分析を行なうことにより、トレルチの「歴史化」概念の構造の全容を明らかにしていこう。

### 「歴史を歴史によって克服する」というフレーズの構造

トレルチによる最後の主著であり、彼の命の結晶ともいえる『歴史主義とその諸問題』は次のような言葉で締めくくられている。

課題そのものは、意識的にせよ無意識的にせよどの時代にも常に存在してきた。しかし、われわれが生きているこの瞬間にはまさしく特別な意味で切迫した課題になっている。建設の理念とはすなわち、歴史を歴史によって克服することであり、新たな創造の基盤を平らにすることである。この基盤の上に、歴史哲学の目標である現在の文化総合は基礎づけられねばならない。これについては、個人の能力の及ぶ限りで、次の巻で扱われるだろう。<sup>(12)</sup>

この「次の巻」はトレルチの急逝によって仕上げられることはなかったが、こ

ここに記されている「歴史を歴史によって克服する」というフレーズは、トレルチの言葉として最も有名なものの一つとして遺された。しかしながら、これが意図することについてはさまざまに解釈され、解釈者にとってある意味都合の良いスローガンとして用いられることもしばしばあった。トゥルツ・レントルフはこの問題を取り上げ、この言葉を正確に理解するためには直近の文脈から理解しなければならないと主張し、詳細かつ卓越した解釈をほどこしている<sup>(13)</sup>。レントルフは、トレルチの《歴史主義》の反省的構造について主張しているが、「歴史を歴史によって克服する」という言葉そのものの分析はほとんどおこなっていない。もちろん、このフレーズを解釈するには、その言葉が置かれた本来の文脈や当時のコンテクストにも留意すべきであるが、われわれはこの言葉そのものに含まれている意味について考察してみたい。

「歴史を歴史によって克服する」という言葉は、一見すると「歴史化」概念と同等の再帰的構造を有しているように見える。歴史を、歴史によって克服するという自己再帰的な意味合いがこの言葉には含まれているし、同時に何かを克服するという反省的な意味をも含んでいる。しかしながら、われわれには「歴史化」概念においては明確に述べられていないことが、このフレーズの言外に表現されているように思われる。ここで注目したいのはトレルチの言い方そのものである。彼は「歴史が歴史を克服する」とは言わず、あえて「歴史を歴史によって克服する」と言うことで、その行為の主体が別に存在することを言い表しているように思われる。歴史がみずから歴史を自己再帰的に克服していくのではなく、「歴史を歴史によって克服する」主体の存在が言外に主張されている。この主体はここでは明確に述べられていないが、その主体とはまさにわれわれ人間主体を意味しているのではないだろうか。トレルチの思想において、「行為」や「決断」といった契機は非常に重要な位置を占めている。このフレーズの直前のパラグラフにおいても、「将来を信ずる人の創造的な行為であり、

敢行」が必要なこと、そのようなことができるのは「信仰と勇気のひと」であると言明している<sup>(14)</sup>。このような人間主体を重視するトレルチの立場こそ、「歴史を歴史によって克服する」ための姿勢であったのであり、現在の文化総合を建設していくためのトレルチの立場を表わしていると言えるのではないだろうか。「歴史化」概念において言い表されなかったわれわれ人間の主体的行為・決断という側面を、「歴史を歴史によって克服する」という言葉によって補完させたといってもいいかもしれない。以上のような立場は、必ずしもトレルチの最終的な立場だったとは言えないかもしれない。トレルチは「決して一つの立場から他の立場へと渡り歩くタイプの思想家ではなかった。むしろ柔軟な適応と受容の力を持って、時と共にいよいよ複雑になっていくタイプの思想家であった」<sup>(15)</sup>とも言われる。トレルチ自身としてはおそらく暫定的な立場であったのだろう。彼を襲った突然の死によって、暫定的な最終的立場という形式をとらざるをえないのであるが、その立場を表わすのが「歴史を歴史によって克服する」という立場である。

トレルチは『歴史主義とその諸問題』の序文において、「続く巻では、この巻で獲得した新たな視点のもとに立つ」<sup>(16)</sup>という宣言をしている。この「新たな視点」というのがまさに、『歴史主義とその諸問題』の末尾に掲げられている「歴史を歴史によって克服する」という視点であろう。そしてこの「新たな視点」という言葉が暗示しているように、「歴史を歴史によって克服する」という立場は、例えば、それまで築き上げてきた立場を乗り越えるような「新しさ」を有しているといえるのではないだろうか。このフレーズの「克服する」という言葉からは、歴史のなかにいるわれわれ人間主体が歴史によってそれを乗り越えていくという、自己超克的な強い意志を感じ取ることができよう。したがって、トレルチの「歴史化」概念と「歴史を歴史によって克服する」というフレーズの間には微妙な差異があり、この揺らぎにこそトレルチの《歴史主

義》概念を明らかにする鍵があるように思われるが、われわれは本稿の考察においてはそれを指摘することにとどめよう。

以上の考察からは、まだまだトレルチの《歴史主義》概念の全容を明らかにしているとはいえ、またトレルチが「歴史主義の克服」を目指したのかどうかについては未だに断定的なことは言えないが、本稿における考察を足がかりにしてさらなる探究を進めていきたい。

(しおはま・けんじ 北海学園大学大学院文学研究科英米文化専攻博士(後期)課程)

[註]

- (1) Ernst Troeltsch, *Der Historismus und seine Probleme. Erstes Buch: Das logische Problem der Geschichtsphilosophie* (1922), in: Ernst Troeltsch Gesamtausgabe Band 16, 1098. 以下、トレルチの『批判版全集』(Ernst Troeltsch Kritische Gesamtausgabe)はKGAと略す。
- (2) Ernst Troeltsch, „Die Krisis des Historismus (1922),“ in: KGA 15, 437-438.
- (3) KGA 16, 281.
- (4) この「再帰的構造」については、トゥルツ・レントルフの考察 (Trutz Rendtorff, „Geschichte durch Geschichte überwinden. Beobachtungen zur methodischen Struktur des Historismus,“ in: *Troeltsch Studien*. Neue Folge 1, hrsg. von Friedrich Wilhelm Graf [Gütersloh: Gütersloher Verlaghaus, 2006], 303) を参考にしている。レントルフはトレルチの歴史主義の構造を「《反省的》歴史主義」(reflektierter Historismus) として特徴づけているが、これはハルトムート・ルッディースの「再帰的歴史主義」(Hartmut Ruddies, „Geschichte durch Geschichte überwinden«. Historismuskonzept und Gegenwartdeutung bei Ernst Troeltsch“ in: *Die Historismusdebatte in der Weimarer Republik*, hrsg. von Wolfgang Bialas, Gérard Raulet [Frankfurt am Main: Europäischer Verlag der Wissenschaften, 1996], 204) に依拠している。ところが、ルッディースはヘルベルト・シュネーデルバッハの「歴史主義の二つの段階」における「再帰的構造」についての議論 (Herbert Schnädelbach, *Philosophie in Deutschland 1831-1933* [Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1983], 54f) を引き合いに出している。「再帰性」というと社会学におけるギデンズの「再帰的近代」についての議論が想起されるが、われわれの議論はそれとは直接的には関係せず、このレントルフ——ルッディース——シュネーデルバッハという系譜に連なる「再帰的構造」を問題とする。
- (5) KGA 15, 437-438.
- (6) KGA 16, 371.
- (7) KGA 16, 1098.
- (8) KGA 16, 1016.
- (9) Ernst Troeltsch, *Glaubenslehre*. Nach Heidelberger Vorlesungen aus den Jahren 1911 und 1912, herausgegeben von Gertrud von le Fort, mit einem Vorwort von Marta Troeltsch (München und Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot, 1925), 87-88; E・トレルチ, 安酸敏眞訳『信仰論』(近代キリスト教思想双書)(教文館,

1997年), 99頁。『信仰論』はトレルチの晩年の学生であった、女流のカトリック作家ゲルトルト・フォン・ル・フォール (Gertrud von le Fort, 1876-1971) のノートを基にして編集されている。したがって、トレルチの一次資料として取り扱うことについては注意が必要であるが、われわれがトレルチの思想を知るうえで貴重な資料の一つであり、本稿においては一次資料と同等のものとして扱うこととする。

- (10) この引用で語られていることは、レッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781) が投げかけられて以来の「歴史と信仰」の間の問題へのトレルチなりの解答とも読み取れよう。いわゆる「レッシングの命題」——「いかなる歴史的真理も論証され得ないとしたら、歴史的真理によっては何ものもまた論証され得ない。すなわち、偶然的な歴史の真理は必然的な真理の証明とはなり得ない」——に対する解釈はさまざまあり、本稿では取り扱うことはできないが、いずれにせよ、この「厭わしい広い濠」を架橋する方途として、トレルチは「脱歴史化」を主張しているように思われる。「レッシングの命題」については、安酸敏真『レッシングとドイツ啓蒙』(創文社, 1998年)において卓越した解釈がなされている。
- (11) すでに「歴史化」概念の考察において、「歴史化」がもたらす、ある意味弊害としての歴史的相対主義については述べたが、「あらゆる永遠の真理を動揺させる」働きをもつ「歴史化」は信仰の基盤を大きく揺らがす問題であったと思われる。
- (12) KGA 16, 1098.
- (13) Rendtorff, „Geschichte durch Geschichte überwinden. Beobachtungen zur methodischen Struktur des Historismus“を参照のこと。
- (14) KGA 16, 1098.
- (15) エルンスト・トレルチ, 近藤勝彦訳『歴史主義とその諸問題』上巻 (『トレルチ著作集4』)(ヨルダン社, 1980年), 337頁 (近藤勝彦「解説あとがき」)。
- (16) KGA 16, 163.